

「情報と私」

富山市立西部中学校 三年 川端 悠花

私は今まで、ニュースで流れてくる情報をどこか他人事のように感じていました。

「今日は百人以上が新たに感染しました。」

この言葉が日常に溶け込んで、確かに「大変だな」とは思ったけれど、どこか実体のない話のような気がしていました。

そんなある日、誰もが知っている著名な芸能人が亡くなりました。多くのメディアでトップニュースになり、SNSには悲しみの声が溢れていました。それまでも多くの方が亡くなっていたのに、そのときになってコロナの脅威を一気に実感したのを覚えています。人の命はみな同じ重さのはずなのに自分の反応に矛盾したものを感ずりました。

そんな時、私の通っていた小学校について驚きのニュースが報道されました。

「四月学校再開。同じ小学校の児童が複数名感染。クラスターか。」

報道と共に、徐々に学校への厳しい見方が増えていったように思います。しかし私は本当に学校側が悪いのか疑問でした。普通に考えて、テレビで毎日のようにコロナの危険性が報道されているのに、感染対策を十分に行わずに学校を再開するものなのでしょうか。

調べてみると、学校再開当時の感染者は県内で十数名でした。

また、学校のホームページには窓を開放し、用具の消毒がしっかりと行われていることが載っていました。登校時には「もう少し距離取って。」「手、消毒してね。」という先生方の声を聞くこともありました。ここまで知ると、私にはどこの学校でも感染は起こり得たのだと思えてきました。

では、何が学校側が悪いという「風潮」を強くしたのでしょう。それは、自分の知らない人や場所であるために、多くの人がニュースを深く知ろうとしないからではないかと思います。もしそれが自分の身近なところで起きたものだとしたら、本当にそうなのか疑問に思っただけかと思うのです。コロナの脅威についても同じです。もっと早くからニュースを自分のこととして考えていたら、私たちはもっと気を遣って行動していたはずですが。そして多くの人がそうしたなら、地方のお祭りも、楽しみだった修学旅行も中止にならなかつたかも…と悔やまれます。

これは、いじめ事件や異常気象、世界の紛争のニュースの受け止め方にも通じます。本当に自分と同じように地球に暮らしている人に起きていることだと考えたなら、とても身近なことと感ずるのではないのでしょうか。悲惨なニュースなら救ってあげたいと思い、幸せなニュースなら自分も嬉しくなります。一度も会ったことがない私達が、お互いの幸せを願う、きつとこは温かい世界に導いてくれるでしょう。人としてとても素敵だと思えます。だから私はどんなニュースも身近な事として捉えられる人でありたいと今、思っています。